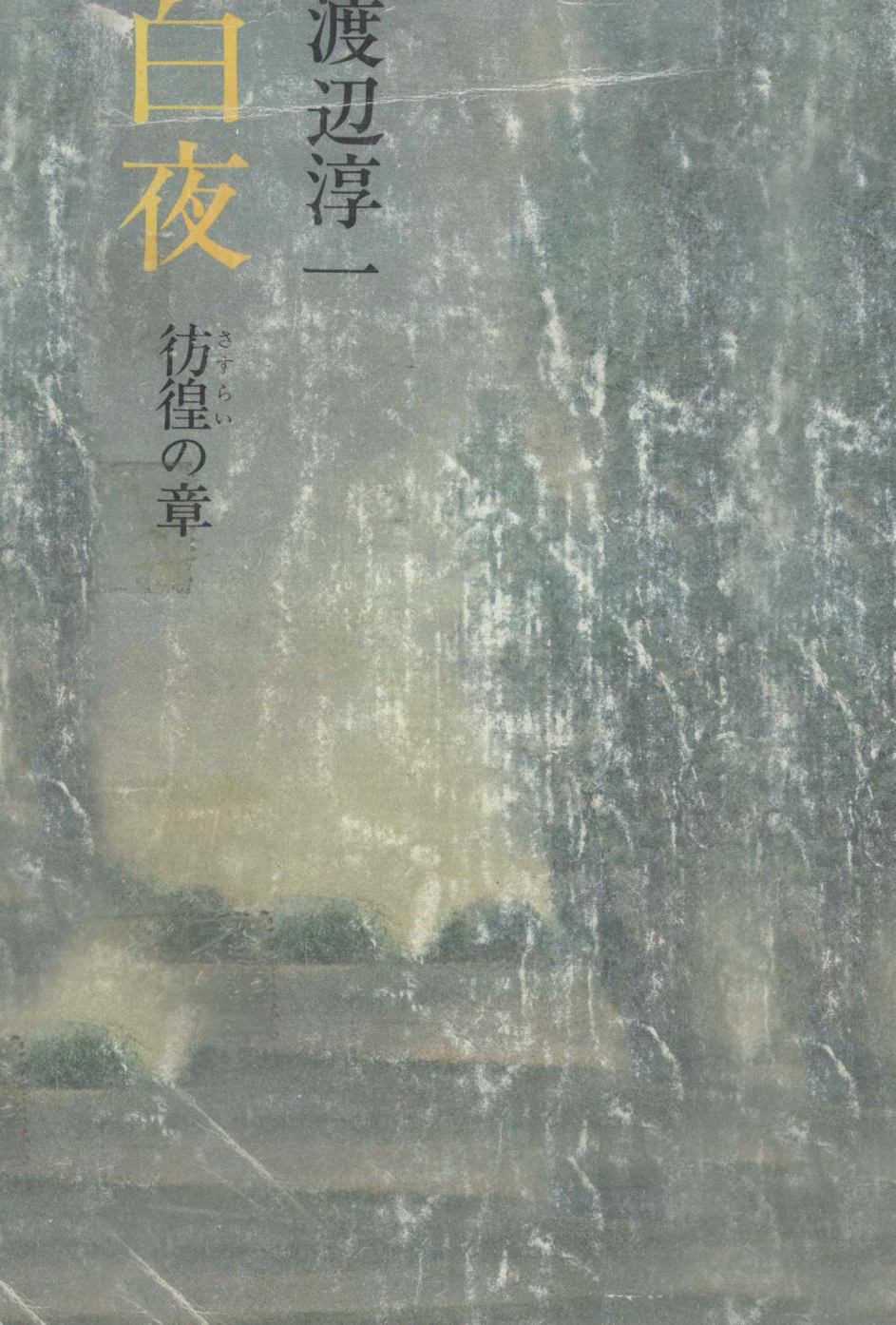


白夜

渡辺淳一

さすらい
彷徨の章



白夜

さすらい
彷徨の章

渡辺淳一

中央公論社

白夜 オビエ 彷徨の章

定価九八〇円

©一九八〇

昭和五十五年七月二十五日初版発行
昭和六十三年七月二十五日二十版発行

著者 渡辺淳一

発行者 嶋中鵬二

印刷 三晃印刷
製本 大口製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目一七
番番 東京二二三四

検印廃止

ISBN4-12-000952-1

白 夜

彷徨たぐひ
の章

一

二月の大学のキャンパスはまだ深々と雪に閉ざされていた。わずかに構内を縦断して走るメイ
ンストリートだけが、車の交叉できる幅だけ除雪されていたが、それも午後からの雪でうずまり
かけていた。早い雪の夕暮れで、左手の大学本部とそれと向かい合った生協の窓にところど
ろ明りが灯きはじめていた。

高村伸夫は同級の倉田と、雪の構内から大学正門前に出ると、電車通りを渡った先の「ゲー
テ」という喫茶店に入った。店は手前にカウンターがあり、奥にボックスが並び、なかほどに煙
突をつけた石油ストーブが赤く燃えていた。

「おっ、あったけえなあ」

入るなり、二人は入口で軽く足踏みし、頭からオーバーの肩口に積った雪を振り落とすと、雪の
外が見える窓際のボックスに向かい合って坐った。外は暗くなってきているがまだ四時で、喫茶
店には学生らしい客が十人ほど雑談したり本を読んでいる。

「コーヒーを二つ」

注文をきききた色白で丸顔のウェイトレスにいつてから、倉田は伸夫を見た。

「それで、お前どうする？」

「どうするって、俺は理学部なんかじゃ、やっていく自信がないよ」

「しかし、他に行くところもないだろう」

二人はいま教養部の事務室へ行って、この春からの学部移行の発表を見てきたところだった。

彼等の大学の教養課程は、理類と文類に分かれていて、二年目の後期に各々が希望する専門課程へ移行することになっていた。このとき何科を希望するかは人によってさまざまだが、希望者の多い学科は教養課程の成績の順で決められる。そのため、学生達は選択カードに第一志望から第二志望、自信のない男は第三志望まで書いて提出することになる。

この年、昭和二十九年の大学の理科系の花形は工学部で、それも機械、建築、電気科などに人が集中し、冶金、採鉱といった科は、炭坑斜陽化の影響で希望者は少なかった。他に農学部では農芸化学、農政、理学部では応用化学などが人気があった。

伸夫は一応、第一志望に農学部の農政を書き、第二志望はなにも書かなかった。それは自信があったということではなく、農政以外なら、どこへ行っても同じだと思っただからである。

倉田は第一志望に工学部の建築を、第二に理学部の地質を書いたが、予想どおり第一志望のほうは落されていた。

「とにかく、俺達はあまり贅沢をいえた身分じゃないからな」

倉田は自嘲するやうにいうとコーヒーを飲んだ。たしかに二人とも、教養の成績は自慢できたものではなかった。仲夫は数学演習、物理、化学などはもちろん、選択の心理や法律なども、すべて合格最低線の「可」で、わずかに英語と第二外国語のドイツ語、それに生物だけが優と良かった。倉田も似たやうなもので、成績表を見ながら「可はよしとすべきだ」などとつぶやいていた。

「とにかく、俺は仕方がない。地質へ行くよ。お前もこないか」

倉田の第二志望の地質はまだあいていたし、他に数学とか地球物理なども定員に余裕があった。「しかし、俺は理科にはまるで自信がないんだ。農政を希望したのも、あそこが理科系のなかでは一番、文科に近いと思つたからね」

「じゃあいつそ文学部のほうへ移つてみたらどうだ、あそこならあいてるだろう」
「そうだな……」

仲夫はうなずいたが、それも決めかねた。

この大学は国立の総合大学とはいへ、もとは農科大学から発達しただけに、理科系の学部が早くからできて充実していた。それにくらべて文科系は戦後の昭和二十五年に文学部が、次いで法学部と経済学部ができるといった具合に日が浅く、スタッフや研究設備もまだ整っていなかった。教授達のなかには、名目はこちらの教授でありながら、冬のあいだは東京へ逃がれ、気候のよい夏のあいだだけ集中講義をする、というやうな人もいた。

仲夫が自分は文科系が得手だと思ひながら、理類に入ったのは、理科系のほうが充実している

し、それに理類から文類にならいつでも移行できる、という考えがあったからである。いまになってみると、その考えは正しかったことになるが、それにしてもいまさら、東京の教授の出張講義の多い文科に行くのは気がすまなかつた。

「それにしても本当によくサボったなあ。あれだけサボって学部にすすめりゃ、よし、としなければならぬぜ」

倉田がゆっくりと煙草の煙を吹き出してからいった。

たしかに倉田も伸夫も講義はよく休んだ。出ても出欠だけととすぐ逃げ出し、一方がいないときはどちらかが出て代返をした。一度倉田がいないと思って返事をする、隅のほうに来ていて、二人で同時に返事をしたこともあった。そんな状態だから出欠をとらない講義は、ほとんど出なかった。

もっとも休んだとはいえ、倉田と伸夫とでは理由が少し違っていた。

倉田の場合は富山の出身で、家の内情は詳しくわからないが、仕送りが少なく、ほとんどアルバイトで生活費を稼いでいた。講義をサボるのはそのためで仕事に出ているか、あとは大抵下宿で寝ていた。一年浪人しただけだというが、どういふわけか伸夫の二つ年上で、がっしりした体つきをしていた。

これに対して、伸夫は一年目の初めるときだけ講義に出ていたが、秋口からほとんど出なくなり、受験勉強をはじめだした。大学に入って受験勉強というのはおかしいが、このころ伸夫はいまの大学をやめて、東京の大学を受けなおすことを考えていた。

伸夫の高校からは毎年、東大に十人前後、一橋や京大をいれると、二十人近くが道外の一流校へすすんでいった。あとは地元の北大へ、浪人もいれると百二、三十人が入る。いわゆる地方の名門校であった。

高校三年のとき、伸夫は東大を受けようかどうか迷った。成績は十番前後で、入るとも入らないともいえなかったが、「無理をしなくても、地元めちゃんとした大学があるでしょう」と母にいわれてあきらめた。もっともそれは一つの口実で、伸夫に確たる自信がなかったことが、あきらめた最大の理由であった。

このとき、伸夫と同じくらいの成績で東大を受けたのもいたが、ある者は入り、ある者は落ちた。そして落ちた仲間の大半は、東京へ出て浪人生活をしながら来年を目指していた。

伸夫が、大学にいながら来春受験してみようと思つたのは、夏休みに東京へ行き、浪人している彼等に会つてからである。

地元では一応一流といわれる大学に入って、毎日遊び歩いていた伸夫にとつて、相変らず初志貫徹を目指して東京で受験勉強をしている彼等が、伸夫にはなにか崇高に見えた。望みを下げて地元の大学なら悠々入れた連中だけに、さらに自分を苦しめながら上へ向かう一途さが尊いように思えた。

東京から北海道へ戻つて、伸夫は急速にいまの大学に興味を失つた。理科系で不得手ということもあつたが、なにか場を違えてきたという悔いもあつた。自分が望んだとおり返りまっすぐすまなかつた、そのいい加減さに腹も立てていた。

秋から冬へ、伸夫は一度しまいこんだ参考書を取り出し、再び受験勉強をはじめた。まだまだ、いまからでも間に合うとたかをくくっていたのである。

だが大学に入って半年間、浮かれ遊んだ癖は彼の心と体のかなり奥まで侵蝕しきっていた。受験勉強に熱中しようと思っても、つい他のことに気をとられてしまう。いまさら東京の大学へ行ったからといってどうなる、といった反撥も湧く。さらにまわりが大学生ばかりで、予備校のような緊張感がないこともマイナスだった。友達はみな大学祭だダンスパーティーだといって遊び歩く。新しくできた女友達からも電話がかかってくる。

自分は受験生なのだといきかせても、三度に一度は誘惑に負けて遊んでしまう。このままでは駄目だと思いつながら冬がきた。

十二月、そろそろ願書を出す段になって、伸夫は、国立大学に在籍していて、他の国立大学を受取るときは、一度、いまいる大学を退学してからでなければ受けれない、もし除籍していないことがわかった場合は入学を取り消す、という内規があることを知った。

「そんな厳格にしくたつていいと思うんだが」

伸夫は同じ大学の文類にいて、ひそかに東大を狙っている下田という友達にたしかめた。

「俺もそれをきいて驚いているんだ。でも、駄目だというなら仕方ない。俺は一旦、ここを退学して挑戦するよ」

「そんなことして、東大落ちたらどうするんだ」

「失敗することは考えないさ」

言葉は威勢よかったが、その実、下田は不安そうに目を瞬いた。

仲夫は再び迷った。いまの大学をやめて受験も失敗したらどうするのか。それでは一介の浪人になってしまふ。高校卒だけの男、ただ街をぶらぶらしてなにもすることがないルンペン。そこまで考えて、仲夫は急に怖くなった。いまずぐ働けぬ気も自信もない。そのくせ浪人になって、両親や親戚、そして女友達になんと説明するのか。

迷っているうちに一月になった。下田はいったとおりに退学した。その決断に驚き、怯えながら、仲夫は東京の大学の受験をあきらめた。

二月の国立一期校の受験日に、仲夫は酔いつぶれて女友達のアパートに泊った。

これですべて終わった、そう思いながら、自分の意気地なさに一人で腹を立てていた。

二十日経って一期校の発表があったとき、東大合格者のなかに下田の名はなかった。

どういふわけか、仲夫はそれを見てほっとした。これでよかった、やはり俺の選んだ道は間違っていないかった。そんな安堵が胸に拡がったが、東京で浪人生活をしてきた二人はともに目的の大学に入った。

それから一ヵ月後に、仲夫は雪解けの街で偶然下田に会った。

「これから、どうする？」

「来年、また受けるさ」

「やっぱり東大か」

「いや、わからないよ」

下田は舗道の端を流れる雪解け水を、長靴で堰き止めながら答えた。

自分の臆病のおかげで、伸夫は下田のように浪人になることから救われたが、一度興味を失った大学へは、もう行く気はなくなっていた。

二年目になり、新しい学期がはじまったがそのまま講義には出なかった。といっても前のように家で受験勉強するわけではなく、ただ街をうろつき、キャンパスの芝生で寝ころんで本を読んだ。大学はエルムの学園といわれるだけに、どこにいってもドイツ楡の巨木が枝を張り、北海道独特の西洋芝の上に、広く大きい影を落していた。

やがてアカシヤが咲き、リラの季節になると、構内に赤と白で彩られた観光バスが入ってきた。遠来の客達はクラーク博士の像の前で写真を撮り、陽を受けて黄金色に光る芝生に歓声をあげた。

伸夫は遠くからその人達を見ながら、やはりこの大学にいてよかったのかもしれないと自分にいきかせた。

だが短い夏が過ぎ、足早な秋が訪れると、再び追われるような気持になった。

こんな毎日怠けていいのか、来春からは専門課程である。もういままでのようにサボっているわけにいかない。着実に厳しい時代が近づいてくる。

その焦りは十一月の霽のあと雪がきて、一層切実なものとなってきた。

まだ先と思っていた学部移行が、すでに目前のこととなっていた。

「こんなこといってはおかしいかもしれないが、人間はなんでも、こうするより仕方がないのだ、と思ってやれば、結構できるようになるのではないのかな」

倉田が少し冷えたコーヒーを啜ってからいった。

「適性とか得意といっても、もとをただせば小学生のころ、先生に字が上手と褒められたとか、算数の点数がたまたまよかったとか、そんなことで、好きになっただけのことだろう。他愛ないきつかけで、その科ばかりやるようになる。やるから成績もよくなって自信が出てくる。逆にちよっと叱られたとか、点数が悪かっただけで、ある科が嫌いになる。どれも根本的な素質とは関係ない。文科向き、理科向きといっても、もとをただせば、ごく表面的な理由で決めているんじゃないのかな」

「それはそうかもしれないが、小学校や中学校のときから、長年、自分はそうだと思いきんて過ごしてくるとそうなってくる。素質は関係ないといわれても引き返しがきかない。ものの考え方も見方も、そうしたものに慣れきってしまうからな」

「しかし、お前は絶対に文科系というわけでもないだろう。その証拠に、物理も数学も単位をとったじゃないか」

「数学は六十点すれすれで、物理は追試験（じしけん）で辛うじてだよ」
「それはお互いさまだ」

倉田は健康そうな歯を見せて笑った。

「まあ、地質あたりは、理学部では割合文科に近い科だと思うが、どうだ一緒にやってみないか」

「誘ってくれるのはありがたいが、とにかく俺は文科に行くことを考えるよ」

「でも、ここの文科はいやなんだろう」

「ちょっとときいたんだが、京都に学部編入制度があつて、法学部と文学部で若干名だけど募集しているらしいんだ。あそこの哲学なんかどうかなと思つてな」

「紅萌ゆる丘の花か……」

倉田は三高の寮歌を口ずさんでから、

「しかし、いくら京都が古くて伝統があるかもしれないが、哲学なんかやつたつてしようがないだろう。本にうずまつて屁理屈こねるか、あとはせいぜい学校の先生になるだけだ」

「でも、理学部よりはまじだろう」

「とにかく、お前はこの大学から出たいんだな」

「そんなわけでもないけど」

伸夫は否定したが、たしかに出たい気持がないとはいえない。生まれてから二十年間、伸夫は北のこの街に住んできた。小学校から中学、そして高校と、馴染み深い街で親元から通えて、羨しいといえそうだが、そこにあるつまらなさも覚えていた。

「俺は本州からこの広い大地に憧れてきたんだが、お前は地元にいるのに大分違う。なにかといえは出たいという」

「俺だって北海道は生まれ故郷だから好きにきまつている。でも、その好きさ加減がお前と少し違う。お前は降りしきる雪とか広大な原野とか、澄みきった空がいいという。さすが広い、これが北海道だという。でも俺にはそれが好ましいと思ひながら、一方で我慢ならないとも思う。広

大な原野も真白な雪も、俺にとっては素晴らしくも美しくもない。原野は開拓されていない不毛のままに放置された植民地の名残りだし、雪は道をふさぎ窓をうずめ、屋根を圧しつける白い魔物以外のなにものでもない。冬が近づいたらオーバーを整え長靴を買ひ、石炭の準備をしなければならぬ。雪が降れば毎日道をつけ、戸が狭くならないように屋根の雪を下ろさなければならぬ。寒くて仕事がふえ出費が増すだけで、なんの足しにもならない。雪なんか住んでいるわれわれを苦しめるだけのものだ」

「それは俺だってわかる。二年住んでみて雪のすごさはよくわかった。でも降っている雪は美しいし、雪の夜もきれいだ。雪があるからそのあとの春の緑はいつそう新鮮だし、秋の淋しさも格別というわけだろう」

「お前はまだ本当に北国に住むやり切れなさをわかっていない、お前はまた雪については傍観者なのだ。いってみりゃ観光客と同じ旅人さ。だから雪のくる前の秋の淋しさは格別だとか、冬のあとの春はいいなどと暢気なことをいってられる」

「暢気なことをいっているのではない、美しいものは美しいと正直にいつているのだ」

「たしかに道が落葉でうずまり、空が雪虫でおおわれる晩秋の札幌には、本州にない侘しさがあふれる。それはそれで見方によっては美しいかもしれない。しかし俺はそのあと十一月から十二月にかけて、鉛色の空に雲がきてやがて雪になる、そして雪が一時解けて泥んこ道になって、また降ってくる。降ったり晴れたりしながら確実に冬に向かっていく。あの季節が一番嫌いであつたらないのだ」

「それは俺だって嫌いさ」

「でも、そのとき俺の心がどんなに揺れ、迷っているかわからないだろう」

「迷う？」

「もう何年間も、十一月になると俺はきまって東京へ出たいと思ってきた。こんな暗い陰鬱なところでなく、もっと明るい太陽のあふれた南の国へ行きたい。どうして俺達だけがこんなところで閉じこめられていけないものか。もう北はいやだ。出るのならいまだ。俺のなかでもう一人の声が絶えず叫び続ける。行こうか行くまいか迷う。あの曩の季節がもう一ヵ月続いたら、俺は完全に気が狂って出ていってしまう。でも十二月の半ばになって、一日中雪が降りつめ、朝目が覚めると野も山も町も、すべて雪におおわれて根雪になっているのを見ると、出たいという気持は急に萎えてくる。窓から白一色におおわれた町や野面を見ると、どういうわけか、もう道路も川も鉄道も、南へ通じる道という道はすべて閉ざされたような気がする。もう暖い国へは行けないのだ、あとはひたすらにじっとして、雪が解けるのを待つしかないのだ。そう思ったとき、ようやく心が落着く。また一冬ここで過ごすのだと自分にいきかせて納得する。長い冬のあいだストーブに向かって坐っているのは、そうした迷いのあとのあきらめ、悩んだあとの落着きだ。着きだ。お前にはわからないだろう」

仲夫はいい終えてお冷を飲んだ。倉田は黙って煙草を喫っていたが、やがて喫い残りを灰皿の底でもみ消してからいった。

「俺も富山だから、雪のやり切れなさはわかるよ」